

## 2.南アルプスとリニア中央新幹線について

## 水資源に係るリスク管理について

P15 「田代ダム取水抑制案について」 取水抑制するための水量が不足する不確実性への対応（渇水期を避けた施行の検討等）

○リスク管理の具体例（西俣川付近の断層帯の掘削）

- ・これまでに東俣から西北西方向に向けて実施したコアボーリング（図 14）では、図 15 のとおり、西俣川付近の断層帯の後方を主体に湧水量の増加が確認されています。
- ・このボーリング結果に関して、専門部会委員から、千石斜坑、導水路トンネル及び工事用道路トンネルの掘削において西俣川付近の断層と近接する際、または先進坑（千石斜坑との取付部から品川方）の掘削において西俣川付近の断層と交差する際に、大量の湧水が発生し、西俣川（田代ダムより上流側）の河川流量が減少（※）し、田代ダム取水抑制案の実施時に取水抑制するための水量が確保できないことが考えられるとのご意見を頂きました。

※工事中は、トンネル内に湧出した湧水はポンプアップを行い、千石斜坑または導水路トンネルから大井川に流します。



図 14 東俣川から実施したコアボーリングの位置

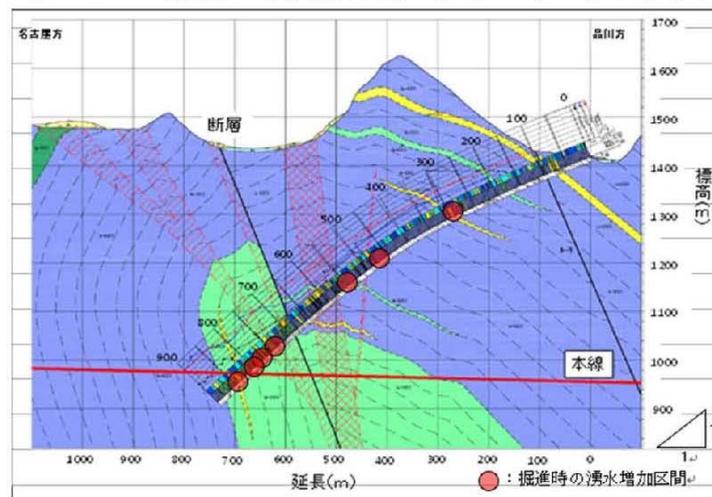


図 15 東俣川から実施したコアボーリングの実施結果

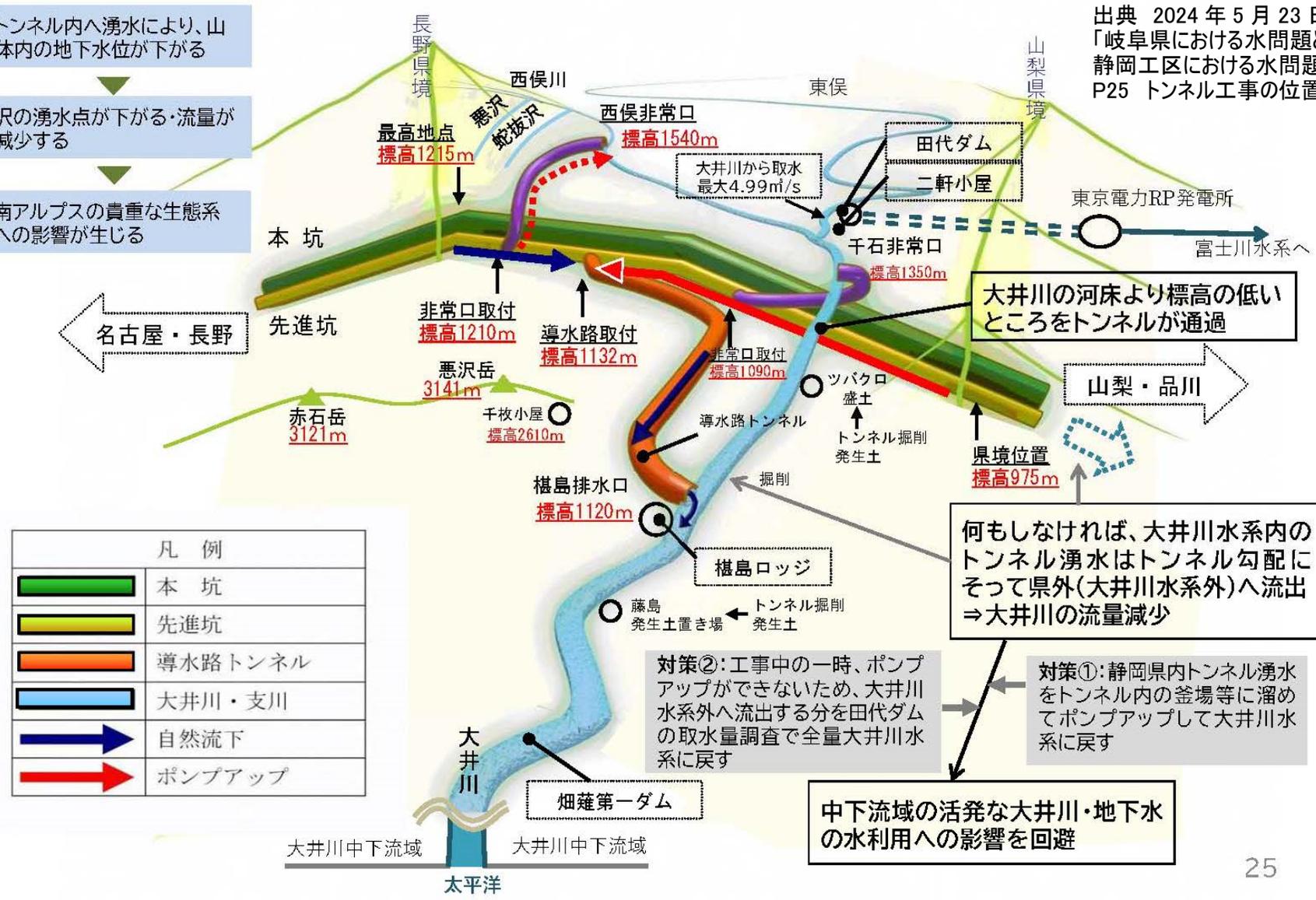
出典

水資源に係るリスク管理について 令和7年6月 東海旅客鉄道株式会社

トンネル工事の位置と大井川の関係 (静岡県作成資料 2023.9.28付に静岡市が加筆)

トンネル内へ湧水により、山体内の地下水位が下がる  
 沢の湧水点が下がる・流量が減少する  
 南アルプスの貴重な生態系への影響が生じる

出典 2024年5月23日 静岡市  
 「岐阜県における水問題とリニア中央新幹線 静岡工区における水問題の関係について」  
 P25 トンネル工事の位置と大井川の関係



凡例	
	本坑
	先進坑
	導水路トンネル
	大井川・支川
	自然流下
	ポンプアップ

# 2025年静岡市議会 6月定例会 総括質疑

2025年6月30日

松谷 清議員

## 2.南アルプスとリニア中央新幹線について

<1回目>

6月12日、南アルプスとリニアを考える市民ネットワークと大井川の水を守る62万人運動の2つの市民団体は、静岡県がリニアトンネル工事巡る地質構造水資源専門部会で水資源分野のJR東海との「対話項目終了」宣言をしたことに対して撤回を求める3点の要望書を県に提出しました。既に長沼議員による代表質問で「終了宣言」に対する市長の受け止めについての答弁がありました。一方で6月11日静岡朝日テレビ・池上彰氏の「リニアTV番組」で前後の脈絡はわかりませんが市長は「土木技術者として私なら南アルプトンネルの工事はやらない」との発言をされています。

<1回目>

「1」 TV番組での市長発言について真意を伺います。

### <市長答弁>

私からは、南アルプスとリニア中央新幹線に関する、4つの質問についてお答えをします。

まず、テレビ番組目の発言についてですが、リニア中央新幹線に関する4つの質問についてお答えをします。

南アルプストンネル工事は、土被りが最大1,400mと大きく、断層破碎体もある中で、トンネル湧水量を抑制しつつ、掘削する必要する必要があります。このため、日本のトンネル工事の歴史の中でも極めて難易度が高い工事になると思います。

テレビ番組のインタビューでは、私の個人的意見として、かつてリニアのルートを選定したときに技術者として私ならこのルートは選択しないという意味で、私ならこの工事はやらないと、発言をしました。

しかし、JR東海は南アルプスルートを選択し、国の事業認可を取り、そのルート上で、山梨工区などはトンネル掘削を進めています。

静岡県内の工事着工となった際は、JR東海は、突発流水等への対応を含めたリス管理を徹底しながら、高いトンネル技術をもって施工されるものと考えております。

「2」 静岡県工区6本のトンネルのうち(資料参照P3)山梨県工区を進めるために3本のトンネル工事＝千石斜坑、道路トンネル、導水路トンネルは先行して実施するとのこと。ところが、東俣からの斜めボーリング調査結果により西俣断層では大量湧水が予測されています。市長はトンネル工事の大井川上流域の生態系への影響も認識されています。

西俣断層に係る市協議会での議論、議会へのこれらデータ含む報告書の資料提供についてどう考えるか。

(資料P2)

## <市長答弁>

次に、西俣断層に係る市議会での議論、議会への資料の提出についてですが、リニア中央新幹線建設工事に係る水資源の問題は、これまで長期間にわたり国有識者会議で、県の専門部会において専門家による科学的で詳細な議論が行われてきました。

水資源への影響の問題を考えるにあたっては、トンネル掘削によりトンネル内流水が発生し、それにより、南アウスの山体内山の中の水にどのような現象が起き、それが沢の流量などの漂流水にどう影響し、それによって、大井川上流域や中下流域でどのような影響が生じるのかを推定する必要があります。

この推定は大変専門性の高い問題であり、議会の場という限られた時間で、十分な議論ができるような内容ではありません。その前提の上で、西俣断層に係る市協議会への議論や議会への資料提供について、どのように考えるかは議会のご判断の問題です。

また、東俣からの斜めボーリングの詳細なデータの公表を市が JR 東海に求めることについては、静岡市として、なぜその公表が必要かについて、私は理解できておりません。よって、市が JR 東海に公表を求めるようなことは現時点では考えておりません。

1) また大量湧水が発生した場合に田代ダム取水抑制案が成立しないとの指摘もあるが、どのように考えるか。

## <市長答弁>

次に、大量湧水が発生した場合に、田代ダム取水抑制案が成立しない可能性についてですが、まず、リニア中央新幹線建設工事の環境影響評価に関する静岡市長の公的な立場について述べます。

静岡市長は、環境影響評価法第 6 条の規定に基づき環境影響を受ける範囲であると認められる地域を管轄する市町村長として、2011 年 9 月に、JR 東海から報告書が送付されました。

よって、静岡市長は工事により環境影響を受ける範囲であると認められた地域として意見を言うことができる立場にあります。

なお、この管轄する市町村というのは、静岡県と市町村においては静岡市だけになります。田代ダム取水の水利抑制案は、静岡市域外の中下流域の水資源の影響を回避するために行われるものであることから、静岡市域内への環境影響の発生ではないため、静岡市としては調節の利害がありません。

よって、中下流域の首長がこの田代ダム取水抑制案に納得しているのであれば、静岡市長はこれら首長の判断を尊重したいと考えております。

ただし、そうだとすると、田代ダム取水抑制案とはどのような方法なのかについては、理解をしている必要があります。

田代ダム取水抑制案という方法は、どのような方法かについては、ここで私の理解を述べたいところですが、これはモデル図などを持ちながら説明をしないと、なかなか誰でもなるほどと思えるような説明にはなりません。

そこで、ホームページ、今市政運営の基礎情報というのをしておりますので、その中の「60の環境 5リニア中央新幹線」のP87、88に、田代ダム止水抑制案とはという説明、これは、私の見解を載せておりますので参考にしていただければと思います。

簡単に述べますが、大量湧水が発生した場合に、田代ダム止水抑制案が成立しないと指摘についての私の考えですが、この指摘が大量湧水発生時という、短い期間に起きる可能性がある現象に対し、止水抑制案が成立しないとしていると、それとも、大量湧水が収まった期間も含めて、大量湧水が発生した場合として、取水抑制案が成立しないとしているのかは、私は存じ上げません。

私は国の有識会議や県の専門部会においては、専門的知見を持った方々による科学的で、丁寧な議論がなされたと認識をしています。

いずれにしても、そういった指摘があるのなら、どのような現象が発生することで、田代ダム取水抑制案が成立しないかについて、科学的根拠を明らかにした上で、それについて、国の有識者会議の見解を聞きになるのが良いのではないかなと思います。

成立の可否について、私が議会の場で公認しているという問題ではないと考えております。

最後に、ジム・アル＝カーリーという、イギリスの理論物理学者が2023年に書いた「人生を豊かにする科学的な考え方」という本の言葉をご紹介します。

本の100ページの記述ですが、「ある主題について意見を述べるのに、最もふさわしい人は、最も慎重に熟考しながら議論を進める人でもある。可能性が高い。

論じられている問題のどこに、確かな証拠が不足しているのか、自分の理解のどこに弱みがあるのかが分かっているからだ」とあります。このことは、国の有識者会議が、なぜ3年半もの月日をかけて、最終報告書にたどり着いたかについての示唆を与えてくれます。

有識者会議という場で、意見を述べるのに最もふさわしい、専門家の皆様が長期間、最も慎重に熟考しながら議論を進め、どこに確かな証拠の不足があるのか、論理展開のどこに弱みがあるのかを熟考した上で、最終報告まで行き着いたものだと思います。

また、この本の33ページにこう書かれています。「政治家も多くの人と同じように、大抵は自分の好みやイデオロギーに合致した科学に従う」、私は、この言葉を戒めにして、認知バイアスという思考の偏りが知らず知らずのうちに、自分の考え方の中に発生していないかを確認しながら、自然科学の根拠に基づき、JR東海との対話を進めることを心がけています。

- 2) 静岡工区での3本のトンネル工事は、静岡県の工事認可が前提となります。南アルプス生態系、残土問題にはまだ課題があります。山梨工区の工事と静岡工区の工事とのスケジュール関係はどのように認識されているか、伺います。

## <市長答弁>

次に、山梨工区と静岡工区のスケジュールの関係ですが、山梨工区と静岡工区の工事のスケジュールについて、何を懸念されているのは分かりかねますが、事実として、山梨工区の西端の1.1km区間は、静岡県内になっ

ています。

山梨工区という名前であっても、そこでの工事着手は静岡県内、静岡市内での工事着手になりますので、環境影響評価に関する静岡県と静岡市や JR 東海の対話が合意し、JR 東海の静岡県内での工事着手が容認されない限り、JR 東海は、それが山梨工区であっても、静岡県内の工事は行わないと、認識をしております。

## <2 回目>

2022 年生物多様性国家戦略に基づきネイチャポジティブという考え方が示されています。県自然保護課による 15 の沢の調査がされていたことありますが、南アルプスを愛する市民による蛇抜沢動画調査は大変大きな役割を果たし、JR 東海は「衛星画像とドローン調査」から現地調査に転換しました。更にこの夏、3 つの市民パーティによる沢調査が公表されています。

1) 沢の上流域の現地調査を行うとした JR 東海をどのように評価するか。

## <市長答弁>

JR 東海が沢の上流域の調査を行うとしたことについてですが、これまでも、JR 東海は可能な範囲で調査を行うとしてきましたが、今回、これまでの調査計画よりも上流域で調査に取り組むとしたことは評価できます。市協議会において、JR 東海による現地調査の結果を踏まえ、代償措置等の環境保全措置を検討していきます。

2) 一方で沢調査の範囲について県の生物多様性専門部会と市の違いが明らかになっています。沢の現地調査において、市の基本姿勢及び県との連携をどのように考えるか。

## <環境局長>

沢の現地調査に対する市の姿勢と、県との連携についてですが、市では、まず、国交省モニタリング会議において、重点的にモニタリングすべきとされた 11 の沢の内、特に影響が大きいと予測される 3 つの代表的地点の沢で詳細な現地調査を行うことを JR 東海と合意しています。その際、県と市の関係で二重に調査することがないよう、県と市と JR 東海間で調査内容を調整します。あわせて、調査結果を待つことなく代償措置の検討を行います。

代表的地点の沢への影響について代償措置の適切性が確認できれば、代表的地点以外の沢にも適用できるため、このように代表的な沢でまず検討してみるという方法が合理的であると考えています。

ただし、3 つの沢についてのみ代表的地点として調査・検討すればいいということではなく、今後、JR 東海が行った他の沢の調査結果を踏まえて、市協議会委員により他の沢についても調査や環境保全措置の検討が必要と判断された場合、代表的地点数を 3 沢よりも増やすことはあり得ると考えています。

生物多様性をめぐる議論において代償議論が先行しています。しかし、協議会の代表である増沢氏は上流域におけるレッドデータブックは作成されておらず未知の分野になることを指摘しています。5 月 26 日環境省と 0by30 達成のための生物多様性国家戦略についての議論をする機会がありました。国家戦略に基づき法等の保護地

域以外の設定や 2014 年環境大臣意見において水の減少への備えを掲げているにも関わらず、南アルプストンネル工事による南アルプスの生態系保全に環境省本来の役割を果たしていません。

3) 南アルプスユネスコエコパークを抱えた自治体として環境省の関与を求めないのか。

#### <市長>

私からは、南アルプスユネスコエコパークを抱える自治体として、環境省の関与を求めないかについてお答えします。環境影響評価法第3条において、「国、地方公共団体、事業者及び国民は、環境の保全についての配慮が適正になされるようにそれぞれの立場で努めなければならない」とされています。

リニア中央新幹線建設工事の環境影響評価については、環境保全についての配慮が JR 東海により適正になされるよう、静岡市としても専門家の意見を聞きながら、地方公共団体の立場で努めています。静岡市としてできることに、私は限界を感じておりません。そのような中、なぜ、静岡市がなぜ環境省の関与を求める必要があるのか、私は理解できかねます。

#### <3 回目>

6 月 2 日のリニア地質構造・水資源専門部会において 28 項目の JR 東海との対話事項の 6 項目は終了したと平木副知事・リニア中央新幹線対策本部長は表明した。マスコミ報道も「リニア水問題 JR 東海との対話完了 生態系現地調査、次の節目」(日経新聞)と評された。6 日の国モニタリング会議において県は「水問題は解決した」と発言をしていることに疑問を感じている。

第一に、「条件付き対話完了(○)」とは、「対話中(△)」のことではないか。第 2 に、「今後の主な対話項目 28 項目」は、静岡工区の問題を全てカバーしていないのではないか。今回 JR 東海から示された『田代ダム取水抑制案におけるリスク管理フロー』では、【静岡工区掘削時】については簡略化して書かれているが、【県境付近の先進抗(山梨工区)掘削開始前】【県境付近の先進抗(山梨工区)掘削開始後】と同じだけの管理フローが 6 本掘られると言われるトンネルそれぞれに必要なのではないか。長野県境の問題は項目に入っていないと思われるがどうなのか。第 3 に山梨県境では透水係数、間隙率、水質等が把握され、水収支解析を見直すことが確認されているがそのこと自体が実施されていないうちに対話完了となることは理解に苦しむ。

5 月 27 日の大井川利水関係協議会、6 月 2 日水資源・地質構造専門部会、6 月 4 日国モニタリング会議と続く中での報道は、「利水協 田代ダム案了承」「水資源の対話全て完了」と繰り返されました。専門部会での不自然な「条件付き対話完了(○)」という判断は、静岡県工事に向けてスピード感を持って進行しているという悪意あるキャンペーンに見える。

昨年、鈴木知事は公約で、西俣直下は核心となるエリアなので分かりやすく公表されるべきと答えています。

そこで以下を要望します。